

<講義順序>

0. オリエンテーション：キリスト教にとって「言語」とはいかなる問題か	4/9
1. 現代思想における「言語」の問い	4/16
2. 現代聖書学の動向：歴史・文学・思想	4/23
3. 隠喩・レトリック 1	4/30
4. 隠喩・レトリック 2	5/14
5. 隠喩・レトリック 3	5/21
6. イエスの譬え解釈 1	5/28
7. イエスの譬え解釈 2	6/4
8. イエスの譬え解釈 3	6/11
9. 現代キリスト教思想：言語・解釈・物語 1	6/18
10. 現代キリスト教思想：言語・解釈・物語 2	6/25
11. 現代キリスト教思想：言語・解釈・物語 3	7/2
12. コミュニケーションの問い 1	7/9
13. コミュニケーションの問い 2	7/16
14. コミュニケーションの問い 3	(7/15)

<授業の概要・目的>

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、こうしたキリスト教思想を取り巻く思想状況を念頭に置きながら、キリスト教思想の新たな展開の可能性について議論を行いたい。

そのために本講義では、キリスト教思想とその宗教哲学的基盤の探求というアプローチが試みられる。キリスト教思想の新たな展開には、こうした根本からの議論の組み立てが要求されるからである。2019年度前期は、これまで数年の講義から浮かび上がった諸問題から、「言語」の問題を集中的に取り上げることによって、キリスト教的な視点から宗教哲学を構築する議論を始めたい。

<成績評価>レポートによる。

<受講の注意事項>

・受講生には、講義内容を理解するために必要な復習を行うのはもちろんのこととして、各自の研究テーマとの関係づけを行うための発展的な学習が求められる。必要に応じて講義担当教員との研究相談を行うことが望ましい。

・質問は、オフィスアワー（火3・水3）を利用するか、メール（授業にて、指示）で行うこと。

<問いとしての宗教哲学>

「現代日本における宗教哲学の構築をめざして」（キリスト教専修『キリスト教研究室紀要』5号、2017年3月）

一 はじめに

．．．

おそらく、現代の思想状況において宗教哲学が困難な理由については、次の三つの観点を区別しつつ、論じることが必要であろう。すなわち、宗教に関わる理由、哲学をめぐる理由、そして宗教哲学として宗教と哲学の結びつきに関連した理由である。

まず、宗教哲学が現代において困難である理由としては、近代以降に宗教を取り巻く状況が大きく変化し、そのために、宗教に積極的な意義を認める仕方での思想展開が停滞したことが挙げられるであろう。18世紀に近代的な社会システムが本格的に動き始めるとともに、宗教はしだいに公的領域から私的領域へと移行して行く——政教分離と宗教の私事化——。このいわゆる社会の世俗化の中で、西洋の諸伝統を再編する哲学的試みとしてドイツの古典的な哲学思想が展開され、その中で宗教を再考する議論が一時活発に行われた——カントからドイツ観念論にかけて——。しかし、19世紀中頃には宗教に対するさまざまな懐疑論や否定論（無神論、宗教批判）が思想の大きな潮流を形成してゆき、宗教を積極的な仕方ではテーマ化する哲学的思索としての宗教哲学は思想的な傍流へと押しやられることになる。現代の思想状況も、基本的にはこの社会の世俗化と宗教の私事化によって規定されており、これが宗教哲学を困難なものとしているのである。

この宗教を取り巻く状況の変化は、学としての宗教哲学を含む哲学自体の変化をも引き起こし、この哲学の変化が、さらに宗教哲学の展開を困難なものにした。すなわち、啓蒙主義の思想状況をもたらした実証主義的な近代科学の理念が、⁽³⁾ しだいに近代的知のモデルとして機能することになり、哲学的思惟もそれに大きく規定されるようになる。つまり、自然主義と歴史主義という19世紀の諸学問を特徴付ける思惟に即応した哲学、⁽⁴⁾ つまり実証主義的哲学の台頭である。これは、超越や神概念を視野に入れたカントやドイツ観念論の哲学的思惟とは異なる、いわば「別の思惟」へ移行であり、宗教思想と内的にかみ合う形での宗教哲学は、その哲学的基盤を大幅に喪失することになった。

こうした宗教と哲学を巻き込んだ近代以降の状況の変化（知的世界の構造転換）は、宗教哲学を支える哲学と宗教の関係項（＝「と」）においても変化をもたらすことになる。古代ギリシャ以来、宗教をめぐる哲学的思惟を動かしてきた関係項としての「と」はその内実を変化させつつも、近代に至るまで、そしておそらくは現代も、存続し続けており、それが宗教哲学を可能にしてきた。しかし、この関係項は、宗教と哲学双方の変化の中で、しだいにやせ細り、宗教哲学を支えることがきわめて困難になっている。こうして、今や現代は宗教哲学の貧困な時代となっているのである。⁽⁵⁾

以上が、現代において、そして現代日本において、宗教哲学の構築が困難であることの原因の一端であるが、しかし現在、知的世界の状況は、さらなる転換を予感させてはいないだろうか——いわゆるポスト近代の思想状況である⁽⁶⁾——。この予感が正しいとすれば、宗教哲学の貧困な時代にも、なおも新しい可能性が見出しうるかもしれない。これが、現代日本において宗教哲学の構築をめざす根拠にほかならない。しかし、この課題を遂行するには多くの思索を積み重ねる必要があり、それは本論文の範囲を遙かに超えるテーマとなる。本論文はそのための序論的考察にとどまるものであり、次のような内容について議論が行われる。まず、第二章では、西洋哲学の歴史的展開の中で、宗教哲学がいかなる仕方では存在してきたかを略述し、宗教哲学の輪郭を確認する。続く第三章では、宗教哲学の構築を試みる際に問われるべきいくつかの問題が指摘される。そして最後の第四章にお

いて、序論的考察によって可能になった宗教哲学構築の展望について若干の考察を追加することによって、本論文を締めくくりにしたい。

二 宗教哲学の広がりとその輪郭

西洋哲学の古代から現代までの長い歴史において、そもそも宗教哲学とは何であったのか。過去の宗教哲学を振り返ることは、今後構築が期待される宗教哲学について、その輪郭を描く際の基礎的な作業となる。

・・・

<導入：キリスト教にとって「言語」とはいかなる問題か>

「キリスト教思想と宗教言語—象徴・隠喩・テクスト—」⁽¹⁾

(日独文化研究所年報『文明と哲学』第8号、こぶし書房、2016年、pp.196-209)。

1 はじめに

宗教としてのキリスト教にとって、言葉・言語はその核心に属している。後に論じるように、実にキリスト教は言葉の宗教と言うべき内実を有しているのである。本稿では、次の三つの問いから、このキリスト教における言葉・言語の問題へのアプローチが試みられる。第一の問いは、キリスト教的な宗教経験とその象徴体系において、言語はいかなる位置を占めるのか、というものであり、生の営みとしての宗教(キリスト教)における言葉の位置づけが問題となる。第二の問いは、神についていかに語るのか、つまり、神と人間の関係性における言葉の問題であり、神について語る可能性と具体性をめぐる問いである。そして、第三の問いは、神に関する事柄をいかに他者へ伝達するのかである。これは、人間の相互関係における言葉のあり方に関わっており、宗教的現実をめぐる他者とのコミュニケーションの問題である。

これらの問いを論じるに先だって、いくつかの留意点を確認しておきたい。まず、これら三つの問いは、それぞれ独自の論点を有しているものの、相互にゆるやかに繋がっており、本来は、三つの問いの相互連関を含めた体系的な議論が試みられるべきであろう。しかし、体系的な理論を提示することは本稿がめざすものではなく、本稿では、これらの三つの問いはゆるやかな繋がりを意識することとどまる。また、これら三つの問いに関する議論自体もそれぞれきわめて多岐にわたっており、その全体を考慮することは不可能である。本稿で具体的に参照される議論は断片的なものとならざるを得ない。さらには、本稿では先に挙げた三つの問いに対する解答が試みられるわけであるが、与えられる解答は暫定的なものに過ぎない。その意味で、一定の解答が提示されるにもかかわらず、問いはいわば開いた状態となる。つまり、本稿の読者には、問いをめぐる探究をさらに継続することが求められるのである。

以下の議論は、三つの問いを順次論じることによって進められるが、最後に、若干の展望を示し、補足説明を行うことによって、本稿を締めくくりたい。

2 第一の問い：象徴体系における言語

第一の問いは、キリスト教の宗教経験において、言葉はいかなる位置を占めるかというものであって、この問いを論じる前に、宗教経験の場あるいはその表現としての宗教的象

徴に触れておく必要がある。20世紀は言語とともに、象徴が多くの学的領域において研究テーマとなった時代であり、宗教的象徴をめぐるさまざまな議論が展開された。たとえば、エルンスト・カッシーラーの象徴論は、人間を「象徴を操る動物」と捉え、その精神諸活動をそれぞれに固有な象徴形式において論じることを可能にし、こうした動向に文化人類学における儀礼研究などの進展が重なることによって、宗教をその固有性において、しかも具体性に即して捉えることができるようになった。⁽²⁾ まさに、宗教は象徴において構成された象徴の宇宙と言うべき存在であり、宗教的実在は象徴において成立すると言わねばならない。キリスト教思想における象徴論の展開も、このような文脈に属しており、たとえば、象徴論を基礎として自らの方法論を構築しているティリッヒや波多野のキリスト教思想は、この典型と言えよう。⁽³⁾ ここでは、言語の問題に進む前に、ティリッヒの象徴論によって、象徴概念の特徴を概観しておきたい。なお、ティリッヒの思想の発展過程における象徴論の変化は、ティリッヒ研究にとっては重要な研究テーマであるが、ここでは、後期ティリッヒの象徴論に即した説明を行いたい。⁽⁴⁾

・・・

では、宗教的象徴という観点から見ると、キリスト教はどんな特徴を有しているのだろうか。ここで、注目したいのは、いかなるタイプの象徴を基盤にするかによって、実定的な諸宗教を特徴付けることができる——分類・比較できる——という点である。⁽¹⁾⁽²⁾ 第一の問いはここではじめて解答可能になるのであり、端的に言えば、その答えは、キリスト教の象徴世界は言語を中心としており、キリスト教とは優れて言語的な宗教であるということである。キリスト教において、あるいはやや一般化すれば聖書的宗教において、一切の実在は言語的であるといって過言ではない。ここでは、聖書からいくつかの箇所を引用することによって、この点を確認してみたい。

「1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。4 神は光を見て、良しとされた。」(創世記1章)

このように、神の世界創造は言葉による創造、つまり言語行為として描かれており、この世界は神の言葉に規定されているという意味で優れて言語的であると言わねばならない。また、「イスラエルよ、聞け」(申命記)、「この律法を口から離すことなく」(ヨシュア記1章8節)とあるように、言葉の宗教という場合、さらにその中心は話し言葉、音声、あるいは聴覚におかれていることがわかる。そして、キリスト教信仰はパウロの次の言葉が示すように、まさに言葉を基盤にしているのである。「信仰は聞くことにより、キリストの言葉を聞くことによって始まる」(ローマ10章17節)。

さらに、キリスト教を構成するあるいはその前提となる三つの事柄、つまりキリスト(神の言葉、先在のロゴスの受肉)、聖書、説教のいずれもが、まさに言葉であることを考えれば、言語なしには、キリスト教的実在は成り立たないと言わねばならない。したがって、第一の問いに対する答えは、次のようになる。キリスト教的象徴世界は、根本的に言語的であり、キリスト教は言葉の宗教なのである。

3 第二の問い：神が語る言葉・神について語る言葉

キリスト教的宗教経験の成立の場である象徴体系において、言葉が中心的な位置を占めることが明らかになったのに続いて問題となるのは、では、神についていかに語るのか、という第二の問いである。神が人間に語りかけると言われる場合の言葉、人間が神（あるいは宗教経験）について語る場合の言葉についての問いである。神が語るという場合に、特殊な「神の言語」とでも言うべき言葉が存在するのだろうか。こうした問いは、たとえば、原初的な言語の再発見の試みや人工的な完全言語の創成の試みとなって、ヨーロッパ文化史を貫く、きわめて魅惑的なテーマを形作っているのである。⁽¹³⁾

この第二の問いに対する本稿の解答はさしあたり簡単なものである。つまり、神が人間に対して語りかけるのは人間の言語によってであり、人間が自らの宗教経験を語るのは人間の言語による、と。何か特殊な「神の言語」といったものが存在するわけではない。しかし、この解答は直ちに次の問いを生じる。では、人間の言葉によって神について語るのは、いかなる仕方によってなのか、人間の言葉はいかにして神の言葉になるのか。第二の問いとして探究すべきは、実はこちらの問いというべきかもしれない。また、こうした問いが発生する前提にあるのは、「神と人間との質的差異」という理解であり、ここから神についての認識と語りをめぐる多様な議論が展開されてきたのである。その点で、第二の問いは、キリスト教思想の伝統的な問題と言うことも可能であろう。

本稿では、宗教の言語と世俗の言語との間の類比と相互移行に関して、ケネス・バークのロゴロジーを簡単に参照した上で、⁽¹⁴⁾神について語りを隠喩論として展開してみたい。バークは、人間の日常的な経験的領域（自然と社会）で使用された言葉が、超自然の領域の事柄に関わる言葉として使用される場合に生じる言語諸領域間の動態を論じる中で、経験的領域と超自然的領域の間の諸類比を検討している——なお、もう一つの領域として言語についての言語が存在し、それがロゴロジー(logology)の対象となる——。実際、キリスト教神学で専門用語として位置づけられる用語で、世俗領域から借用されたものである例は、恩恵、創造、霊など、枚挙に暇がない。もちろん、これは聖書的宗教に限ったことではなく、世界の諸宗教において広範に見られる現象である。

たとえば、聖書の伝統からこの典型例として「父なる神」を挙げることができるであろう。つまり、「父」という経験的領域で使用される用語が「神」に適用され、「父なる神」という用語を生み出されるというロゴロジー的な用語の移行であるが、では、ここで成立した類比について、どのように理解すべきであろうか。「神と人間との質的差異」にもかかわらず、経験的領域における「父」をそのまま延長すればスムーズに「父なる神」に至るのだろうか。この問題を追及する上で参照できるのが、1970年代以降に新たな展開を示した隠喩論である。⁽¹⁵⁾以下、この隠喩論によって、第二の問いをさらに論じてみたい。

...

4 第三の問い：他者への伝達あるいはコミュニケーション

これまでの議論によって、キリスト教思想と宗教言語という本稿のテーマは、伝統と革新の弁証法の問題へと接続することになった。伝統が問題となったこと自体は、宗教的象徴が共同体の規定を有していたことを考えれば、決して意外な展開ではない。しかし、伝統や共同体を論じるには、言語化された神についての経験を他者に伝達し共有することが

可能でなければならない。したがって、本稿で問うべき第三の問いは、神について他者へいかに伝達するのか、ということになる。隠喩がもたらした新しい認知は、どのようにして他者に伝達されるのかという問いは、おそらく、この新しい認知が他者においていかに反復的に生成するのかと定式化できるであろう。古い認知を揺り動かしそれを転換しつつ生成した新しい認知が他者においても生起するとき、そこに認知の共有が可能になり伝統の形成が行われるのである。この点を具体的に検討するために、以下においては、文のレベルに存在する隠喩を拡張したところに位置づけられるテキスト・レベルの言語表現、つまり物語という言語表現に注目することにしたい。これはリクールが示した議論の道筋であるが、⁽²⁰⁾ 本稿ではさらにリクールにしたがって、イエスの譬え（ここでは、「ぶどう園の労働者」の譬え＝マタイ 20 章 1～16 節）を具体例とし、イエスの譬えの聞き手である聴衆において、驚きを介して新しい認知が生成するプロセス（＝メッセージの伝達という「言葉の出来事」）を、一つの思考実験として再現してみたい。

・・・

5 むすび

本稿では、「キリスト教思想と宗教言語」というテーマを、三つの問いに分節する仕方で議論を進めてきた。結論は、キリスト教は優れた意味で「言葉の宗教」であるという仕方で要約できるであろう。実に、古代以来、キリスト教思想は言語をめぐる多くの議論を生み出し、さまざまな隣接の学問領域からもたらされる言語をめぐる新たな知見はキリスト教思想を活性化するのに寄与してきたのである。本稿で取り上げた議論は、そのほんの一端に過ぎないが、ここから、哲学、特に哲学的言語論がキリスト教思想に対して有する意義を再確認することができるであろう。言葉がキリスト教にとって中心的であるのならば、キリスト教思想の重要課題は、この言葉についての理解を絶えず深めることにあるであって、哲学はそのための良きパートナーだからである。

・・・